赤と黒

筑紫女学園高校　ＰＮ　とみか

物心ついた頃から私には見える。初めはそれが誰にでも見えるものだと思っていた。だから幼い頃はよく「私はあかなの？くろなの？」と両親に尋ねては困らせていたらしい。

私には人間の体の中心を真っ直ぐに通った一本の芯のようなものが見える。それが一体何なのかは私にもわからない。ただそれがどんな風に見えるのか、一番わかりやすく例えるならば、鉛筆を見たときに中の芯まで透けてみえるようなイメージに近いかもしれない。そして芯のようなそれには二種類ある。赤のものか、黒のものか。必ず一人一色、赤と黒のどちらかの芯が体に通っているのだ。

それを見たときから、私の世界は無意識のうちに赤と黒の二つに分断された。それはどんな幼い子供でも大人と子供の違いを知るように自然なことだった。しかし唯一、私自身のそれだけは見えることがなかった。じっと鏡を見つめても、服を脱いでも、それは見えなかった。二つに分かれた世界で私は自分だけを分別しきれずにいた。

小学校の入学式、小さな背中いっぱいの期待を吸い込んだランドセル。ランドセルのあかとくろ。教室に入ってあかとくろのランドセルを見たとき、閃くように体の芯を連想した。教室の隅から順番に目で追っていく。あか、くろ、くろ…。しかし次は青色だった。ランドセルと芯は関係ない。そうわかってがっかりした。

気付けば私は体の芯があかい人に共通するもの、くろい人に共通するものを探すことに夢中になっていた。小学生ながらにまだ小さな頭で私は必死に法則を探した。答案用紙のあかいまるとくろい鉛筆で書いた間違えた答え。転んだときに流れたあかい血、自分の膝小僧を傷つけたくろいアスファルト。太陽が沈む夕焼けの空と真っ暗な夜中の空。サイコロの一とそれ以外。

法則を探し続けて私は小学校三年生になった。三年生になると理科の授業が始まる。その日は磁石を使った実験の授業だった。

「S極とS極、N極とN極、同じ極同士は反発し、S極とN極、違う極同士はくっつきます」

みんなの前に立って説明する先生の手にある棒磁石は私が見てきた体の芯とよく似ていた。N極の赤とS極の黒。反発するものと、くっつき合うもの。その瞬間、ようやく発見したと思った。正解なんてなくとも私は確信した。クラスの仲良しな女子の二人組は片方が赤で片方が黒。喧嘩ばかりしている男子二人はどちらも赤。あの仲の良い女子の三人組は黒が一人、赤が二人。きっと黒の子を介して、三人は繋がっている。

「…ねぇ！由美、由美ってば」
強く肩を揺さぶられて私は我に帰る。隣に座る真奈がずっと私のことを呼んでいたようだ。
「磁石の実験。磁石、貰ってきたよ」
いつの間にかクラスメイトはそれぞれに動き出し、先生の持っていた棒磁石と同じものを持って楽しそうに実験をしている。そんな中で私の分の磁石まで用意してくれていた真奈は入学した頃からずっと仲の良い友達だ。
そうだ、真奈の体の芯は自分の体の芯と色が違うんじゃないか…！
何度も見てきた真奈の体の芯は赤色だと記憶している。
じゃあ、私は…。
突如、パチンと弾けるような大きな音が教室中に響き渡る。それは私の頭の中で答えが出た閃きの音でも、誰かの持っている棒磁石同士がくっつく音でもなかった。遅れて痛みがきて、自分が今、目の前にいる真奈に頬をビンタされたのだと気付く。
「…もう限界！無視しないでよ！いつも私が話しかけても由美は上の空で私の方なんて見向きもしない。目を合わせてくれることもないでしょ！由美は何考えてるかわかんない。由美なんか大っ嫌い！」
真奈はそのまま教室を出て行く。甲高い声を発する真奈の赤い唇、瞳を潤ませながら私に訴えかける黒い瞳。怒った真奈の様子に遅れて、真奈の言葉が脳を駆け巡る。

決して人に興味が無かったわけではないはずだ。真奈の話だって聞いていたはずだ。色んな人を観察して法則を探しながら、むしろ他人をよく見ていたはずだ。そう、そのはずだ、はずだ、はずだ。
…本当にそうだろうか。
赤と黒の対比のうち、今日初めて見つけた赤い唇と黒い瞳。私は真奈の顔を見ていただろうか。私は他人を見ていたのではなく、他人の体の芯ばかり見つめていたのではないだろうか。そう自分に問いかける。
真奈の「大っ嫌い」という言葉が本心なのか、勢いで発せられたものなのか、それがわからない限り自分の体の芯の色に確信が持てない。そのことに気付いたとき、私は虚無感に襲われた。それは「大っ嫌い」という言葉を浴びせられたときには感じない気持ちだった。
全ては自分のためだった。赤と黒の二つに分断された世界で、自分がどちらに立っているのかを知るためだった。
唯一見えない自分の体の芯はいつの間にか、赤も黒も反発する新たな色を作り出していた。